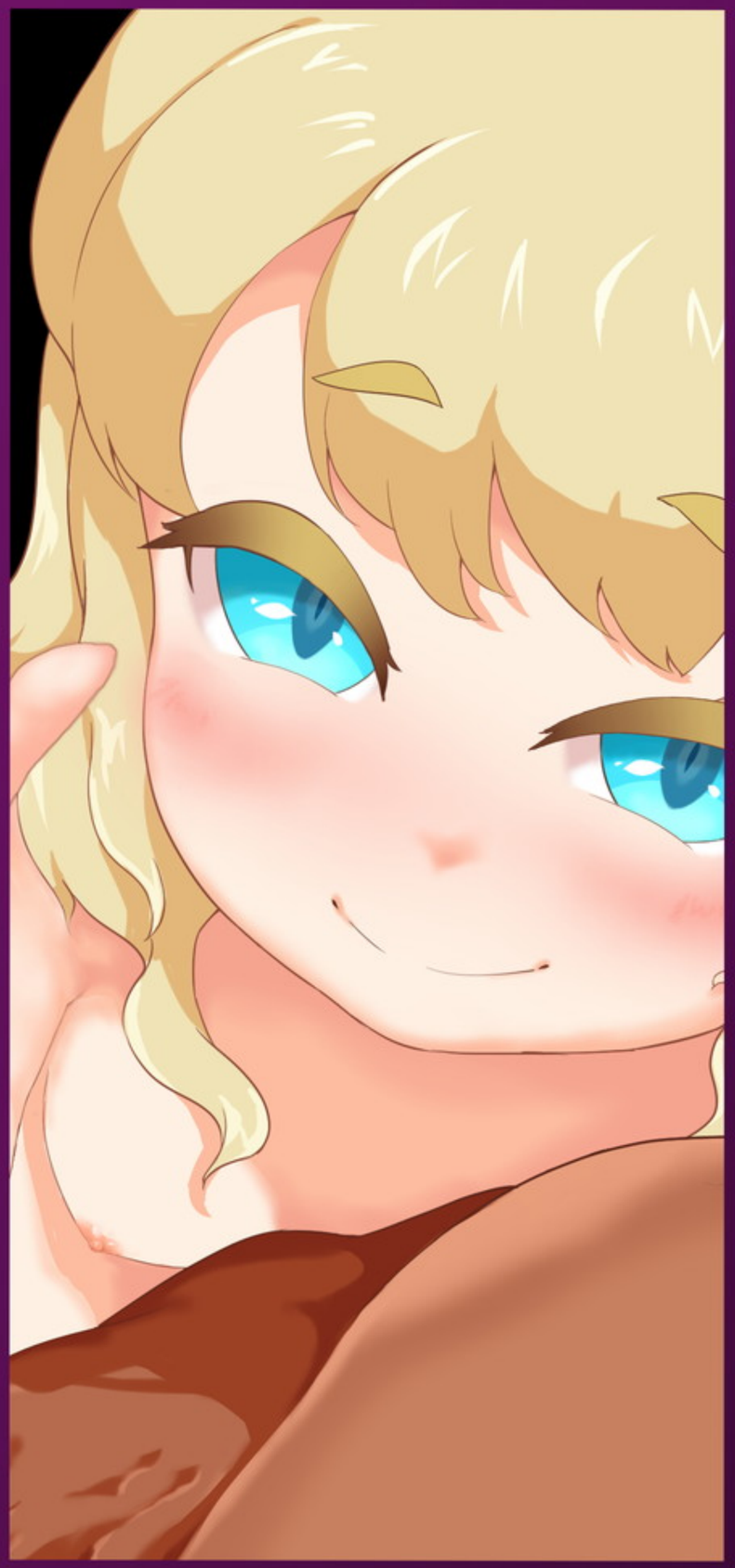
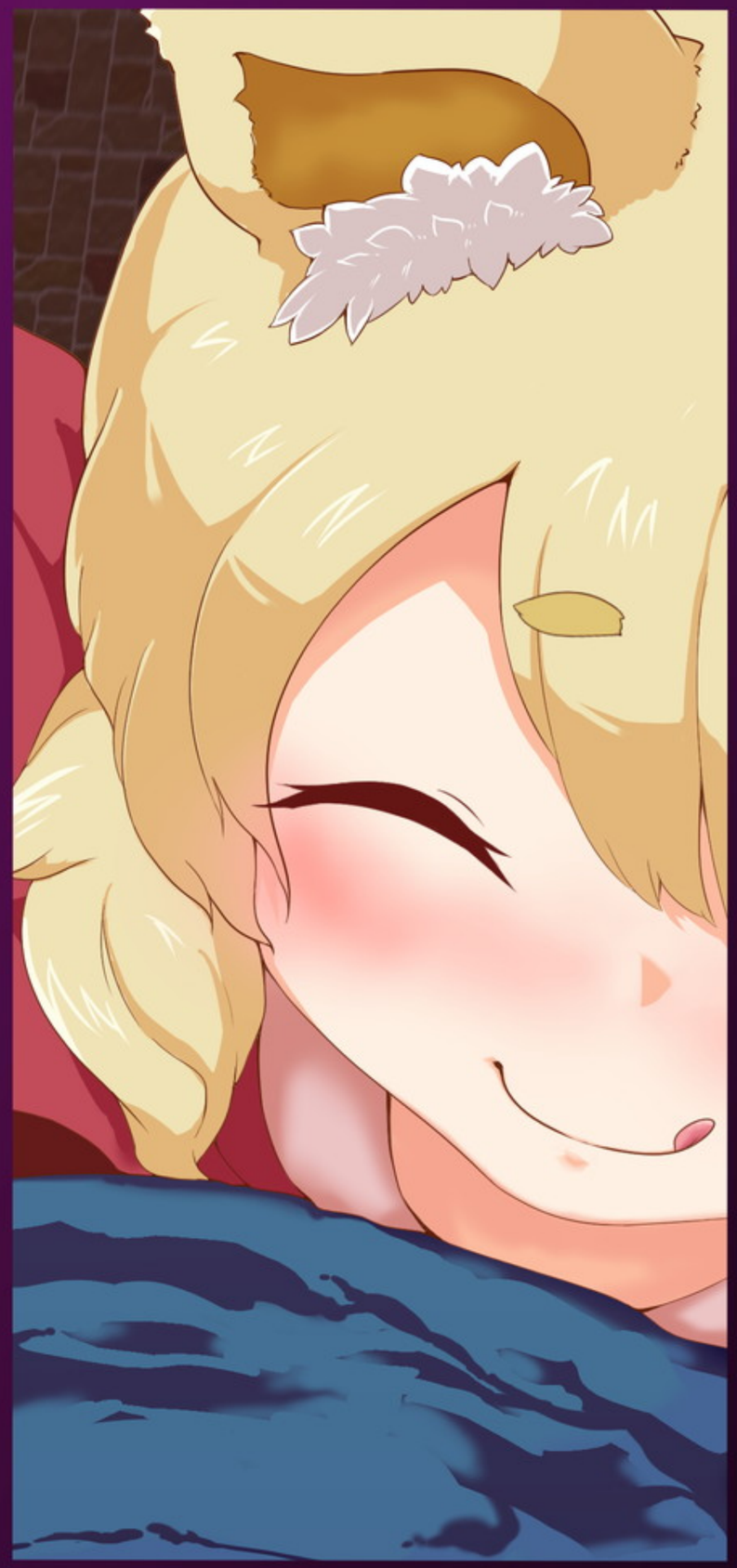
のじゃロリ狐娘の
柔らかおててで搾られたい！

1

ある国の首都
ここには様々な者が住む
人も魔物も、規格外の存在も

ひょ
「もし、もし
そこな立派な体躯のヌシ」

「もし、もし
そこな立派な体躯のヌシ」
振り返ると、幼い獣人の娘が
じいっと俺を見つめていた

「もし、もし
そこな立派な体躯のヌシ」
にっ
振り返ると、幼い獣人の娘が
じいっと俺を見つめていた
珍しい格好で、キモノといったか
住む世界が違うと一目でわかる

「朝霧の狐という旅籠を」存知か？
小恥ずかしいんじゃが・・・
道に迷ってしまってのの」

耳心
「朝霧の狐という旅籠を」存知か？
小恥ずかしいんじゃが…
道に迷ってしまっての」
はたご？　はたご…
ああ、宿屋のことか
大きい町には人族以外にも
いろんな種族がくる
悪魔、天使、魚人、獣人
あげればキリがない

だが【朝霧の狐】といえば
知らない者の方が少ないだろう

だが【朝霧の狐】といえば
知らない者の方が少ないだろう
王侯貴族御用達の高級宿
たった一泊で並みの稼ぎなら
二月分は吹っ飛ぶ
それほどの破格なのに
平民からも客足が絶えず
遠い他国からも賓客が訪れる

だが【朝霧の狐】といえば
知らない者の方が少ないだろう
王侯貴族御用達の高級宿
たった一泊で並みの稼ぎなら
二月分は吹っ飛ぶ
それほどの破格なのに
平民からも客足が絶えず
遠い他国からも賓客が訪れる
世界情勢は議会ではなく
この宿で決められている
そう、『几談交じりに噂される
それが【朝霧の狐】だった

こぉーん
『すまんの、案内まで
申し出てくれるとは』
俺の指をぎゅっと握り
トタトタと付いてくる

『すまんの、案内まで申し出てくれるとは』
俺の指をぎゅっと握りトタトタと付いてくる
年端もいかないこの子はよほど不安だったんだろう

『すまんの、案内まで申し出てくれるとは』
俺の指をぎゅっと握りトタトタと付いてくる
<ーす
年端もいかないこの子はよほど不安だったんだろう
場所だけ教えてもいいが道中、もしもの事があったら寝覚めが悪い

ブ
ブ
ん
。
。
。

「ヌシ、善い男じゃな
ワシの目に狂いはなかったの」
あどけなさを纏ったまま
妖しく笑う

ぶるぶる

『ヌシ、善い男じゃな
ワシの目に狂いはなかったの』

あどけなさを纏ったまま
妖しく笑う

指何手慣れた様子で
何かを確かめるように
指を握り、ほぐされる

ふにゃ

ふにゃ

『ヌシ、善い男じゃな
ワシの目に狂いはなかったの』
あどけなさを纏ったまま
妖しく笑う
ふふ
指何手慣れた様子で
何かを確かめるように
指を握り、ほぐされる
『良い相じゃ・・・
粗野だが捻くれず
太い芯が通っておる』
ぎゅうう♥

『手は生き様を如実に現す』
『気にいったぞ
のう、情人にならんか？』

「手は生き様を如実に現す」
「気にいったぞ
のう、情人にならんか？」
「なに心配いらん
「こうみえて上手いんじゃぞ」
カカカ
カカと笑う二尾の幼狐
情人なんてどこで聞いたのやら・・・

『手は生き様を如実に現す』
『気にいったぞ
のう、情人にならんか？』
『なに心配いらん
『こうみえて上手いんじゃぞ』
カカと笑う二尾の幼狐
情人なんてどこで聞いたのやら・・・
ただ乾いた笑いを返す、が―
ズム

ズバズバ…

『…ワシが二尾に見える
ふふ、そうかや』

あれ、いま俺
声をだしてたか…？

ブ
ブ
ズ
ズ
ズ
ズ
『…ワシが二尾に見える
ふふ、そうかや』
あれ、いま俺
声をだしてたか…？
『ここから宿まで
四半刻といったの』
ボ

『・・・ワシが二尾に見える
ふふ、そうかゃ』
あれ、いま俺
声をだしてたか・・・？
『ここから宿まで
四半刻といったの』
『着くまで
よおく考えておくのじゃ』
ボボ
ボ

小さな手がほのかに熱を帯び
じんじんと伝わる
そして
紅葉のような手指が
太い指をゆるりと
繰り返し握る
手とは、指とは
こんなに敏感なものだったか
じん
じん
じん
じん

指先から掌へ
ふにふにの指を這わせ
腹や先端を甘くこすり
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ふにふにふに

ただ指を、手を
優しく嬲られている
それだけで前が
破裂しそうなほど膨らみ
熱く疼いてしまっている
もう直に触れてほし…
こし♥
こし♥
ヒクッ
ビクッ
ヒクッ
ぷに♥
ぷに♥

…いや、いや待て
俺は何を考えている
ゾクゾクゾクッ
ビクンッ
きゅうう
今、町を歩いているんだ
顔馴染みもいい…る…
落ち着こうとした瞬間
見透かしたように手を握られ
思考が霧散する

まるで毒のような
甘い快感に意識をもっていかれ
もう、周りがよくわからない
ひくっ
ひくっ
ふにっ
ふにっ
いまどんな顔をしてるんだ
だらしなく緩みきった顔を
皆に晒してはいないだろうか

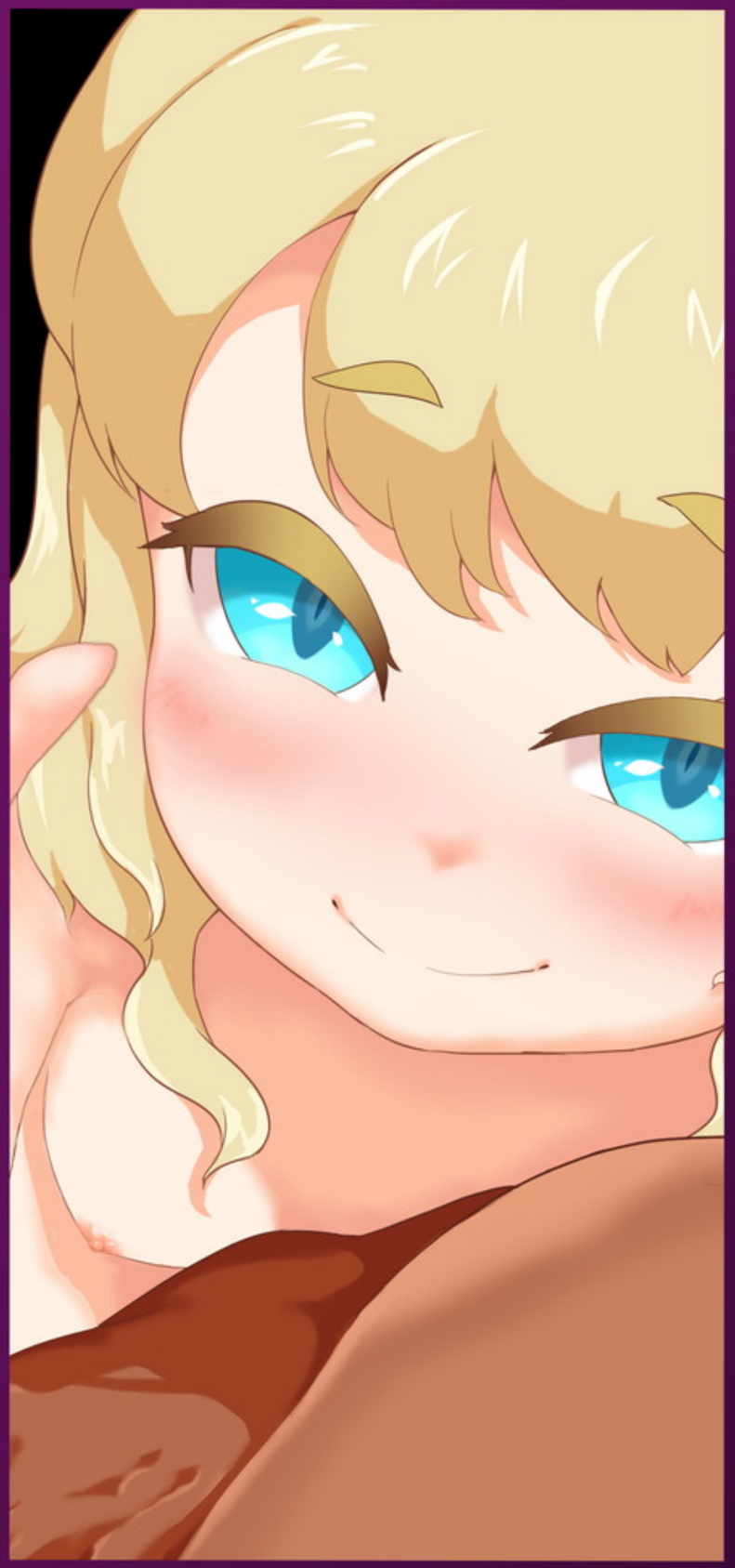
膨らんだ股間を布が擦りあげ
歩くたび、たまらない痺れが走り
それがまた心を濁らせる

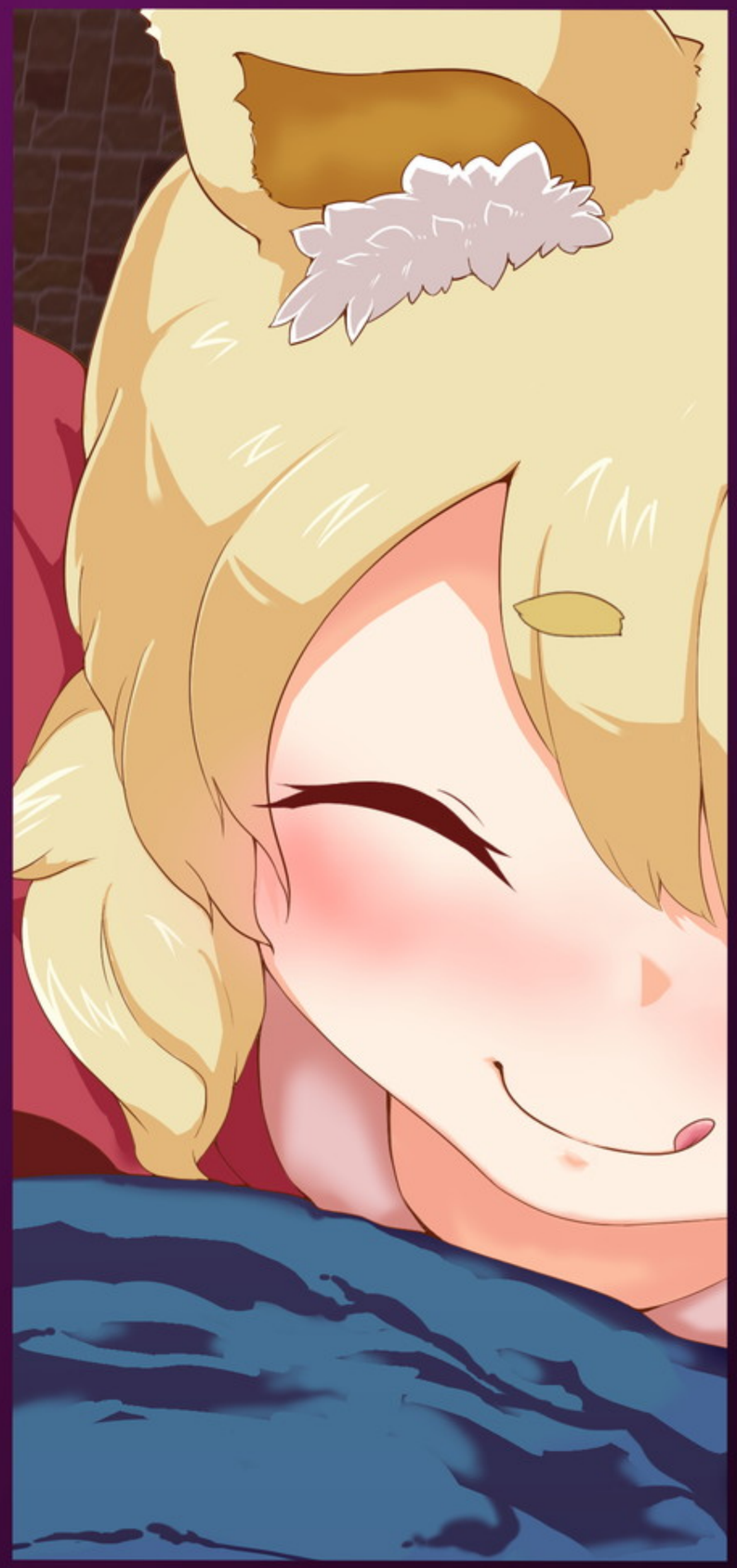
フル フルッ

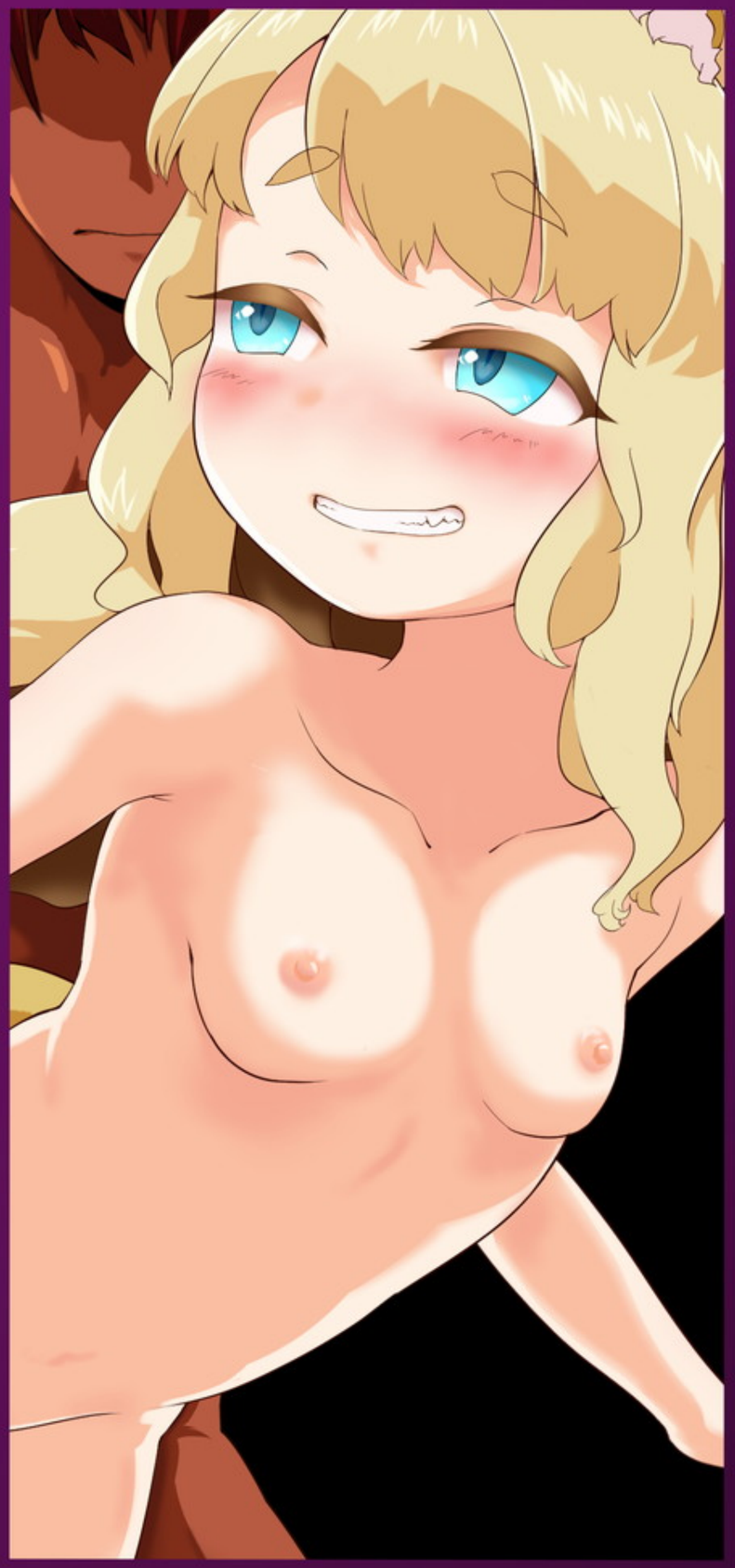
こしこし

ふに ふに

こんな子に不埒な事など
決してできない…。
ただ一歩一歩、宿に進むんだ
耐えて、耐えて、そうしたら…。







4

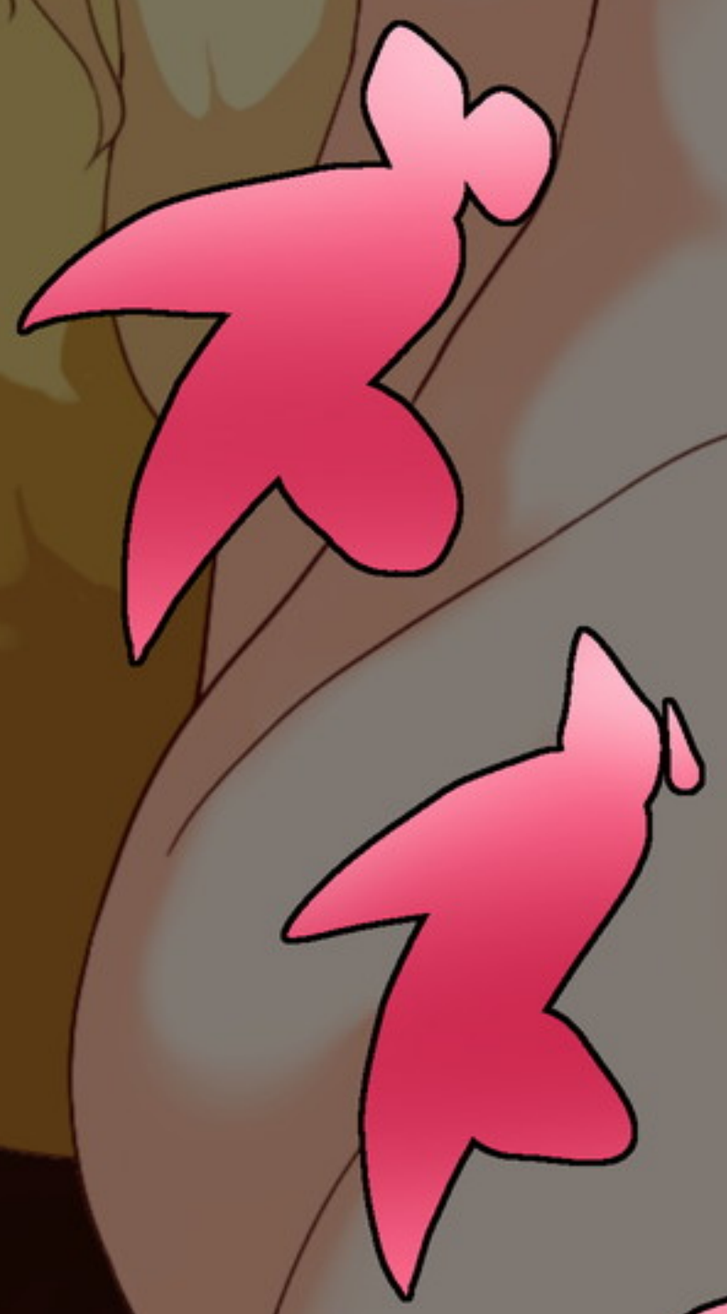
人外の手に堕ちゆく男に何気なく提示されたのは命運をわける選択

『のう、ここらで少し
変わった趣向はどうじゃ？』
少し離れ
その小さな肢体を
見せつけるよう腰かけ
ふふ

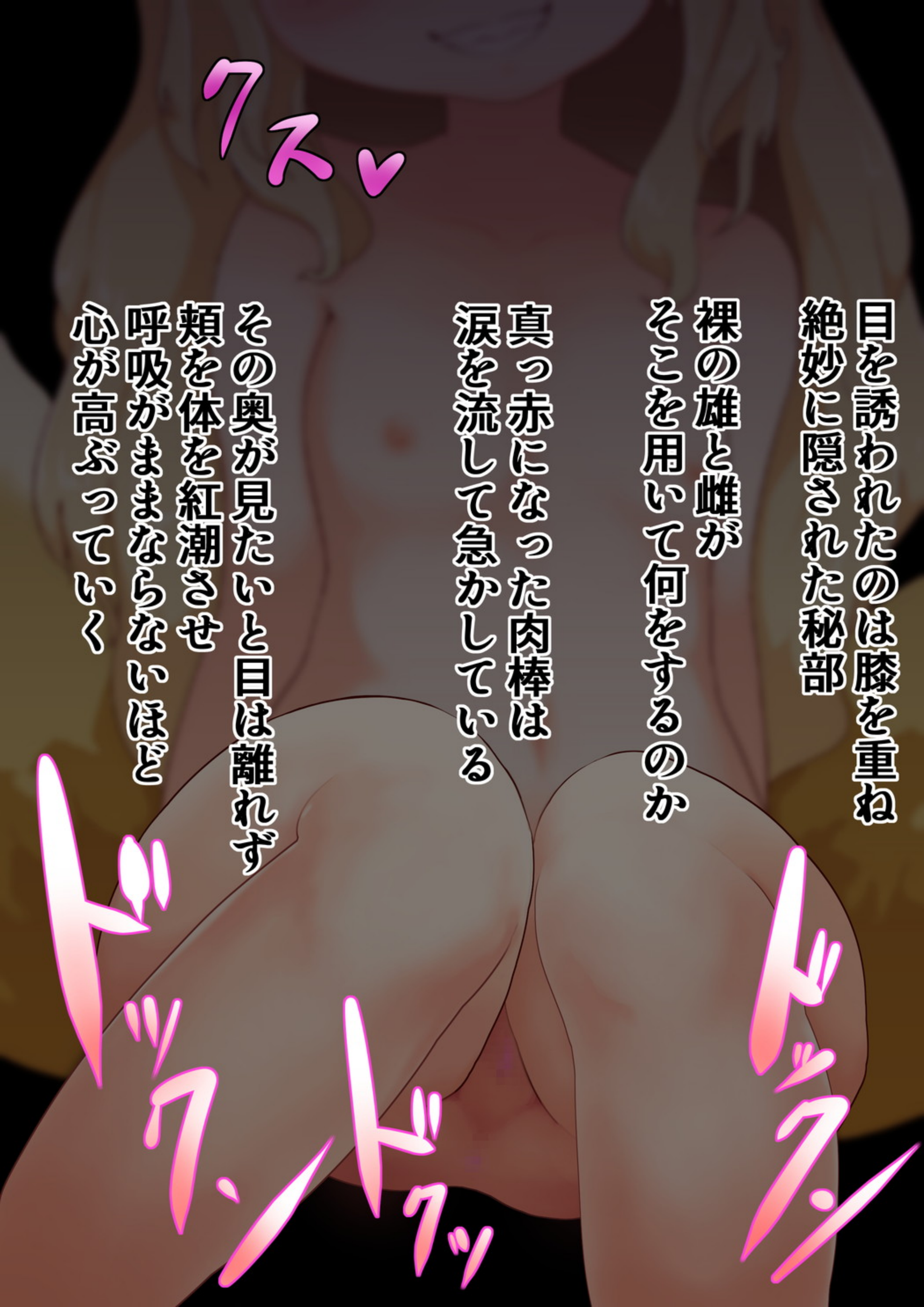
にこ♥
「のう、ここらで少し
変わった趣向はどうじゃ？」
少し離れ
その小さな肢体を
見せつけるよう腰かけ
「ヌシがあまりにも
可愛く悶えるものでの」
「少し興が乗った」
くすりと笑うと
目をあわせ、視線を促す

目を誘われたのは膝を重ね
絶妙に隠された秘部
裸の雄と雌が
そこを用いて何をするのか

目を誘われたのは膝を重ね
絶妙に隠された秘部
裸の雄と雌が
そこを用いて何をするのか
真っ赤になった肉棒は
涙を流して急かしている



ドクン!
ドクン!


クスッ
目を誘われたのは膝を重ね
絶妙に隠された秘部
裸の雄と雌が
そこを用いて何をするのか
真っ赤になった肉棒は
涙を流して急かしている
その奥が見たいと目は離れず
頬を体を紅潮させ
呼吸がままならないほど
心が高ぶっていく
ドクンドクッ
ドクン

そんな俺の様子を
満足げに眺めながら
女狐がゆらりと腰を動かすたび
くちゅ、くちゅと
微かに水音が響く

ふにふに♥

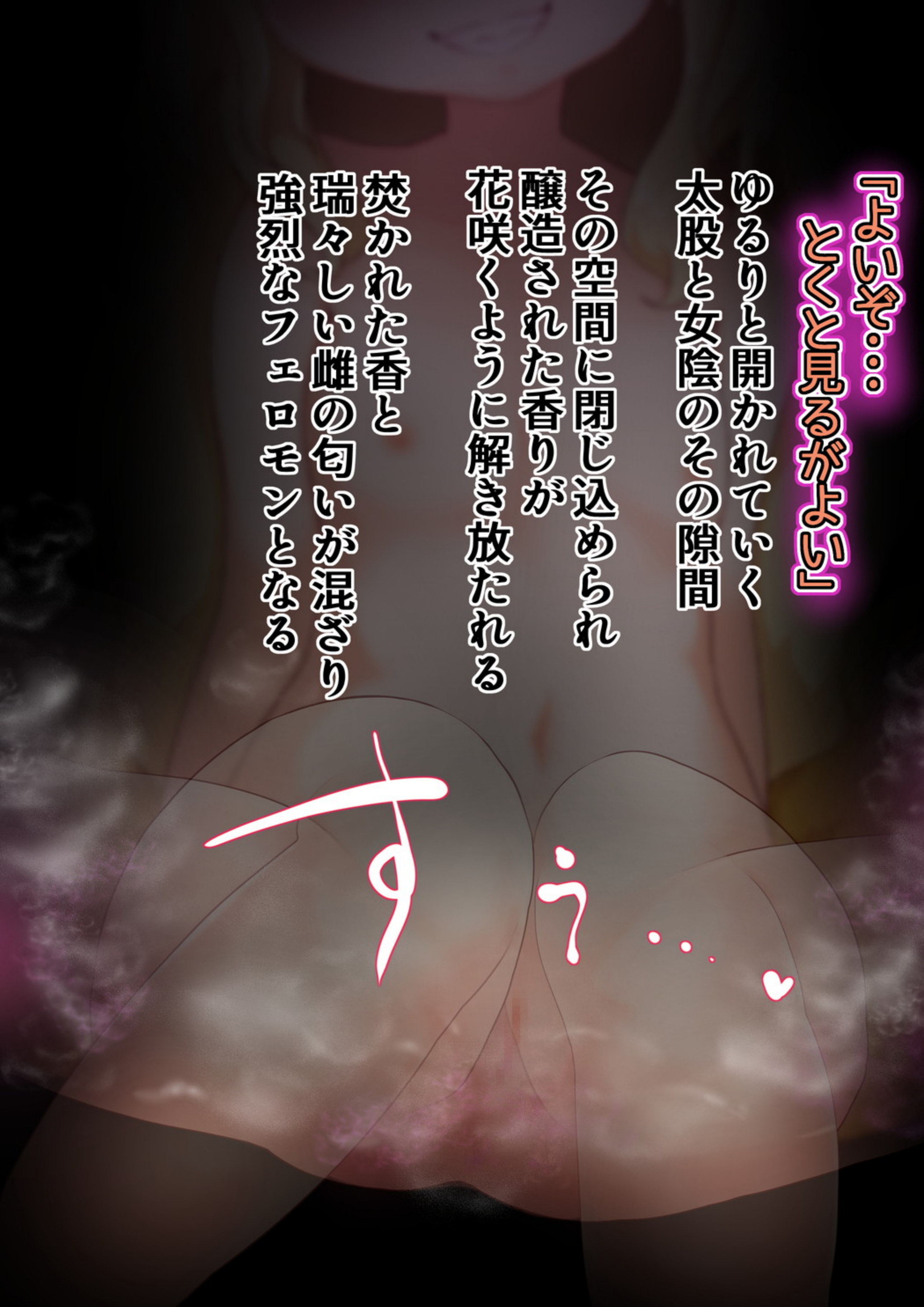
そんな俺の様子を
満足げに眺めながら
女狐がゆらりと腰を動かすたび
くちゅ、くちゅと
微かに水音が響く

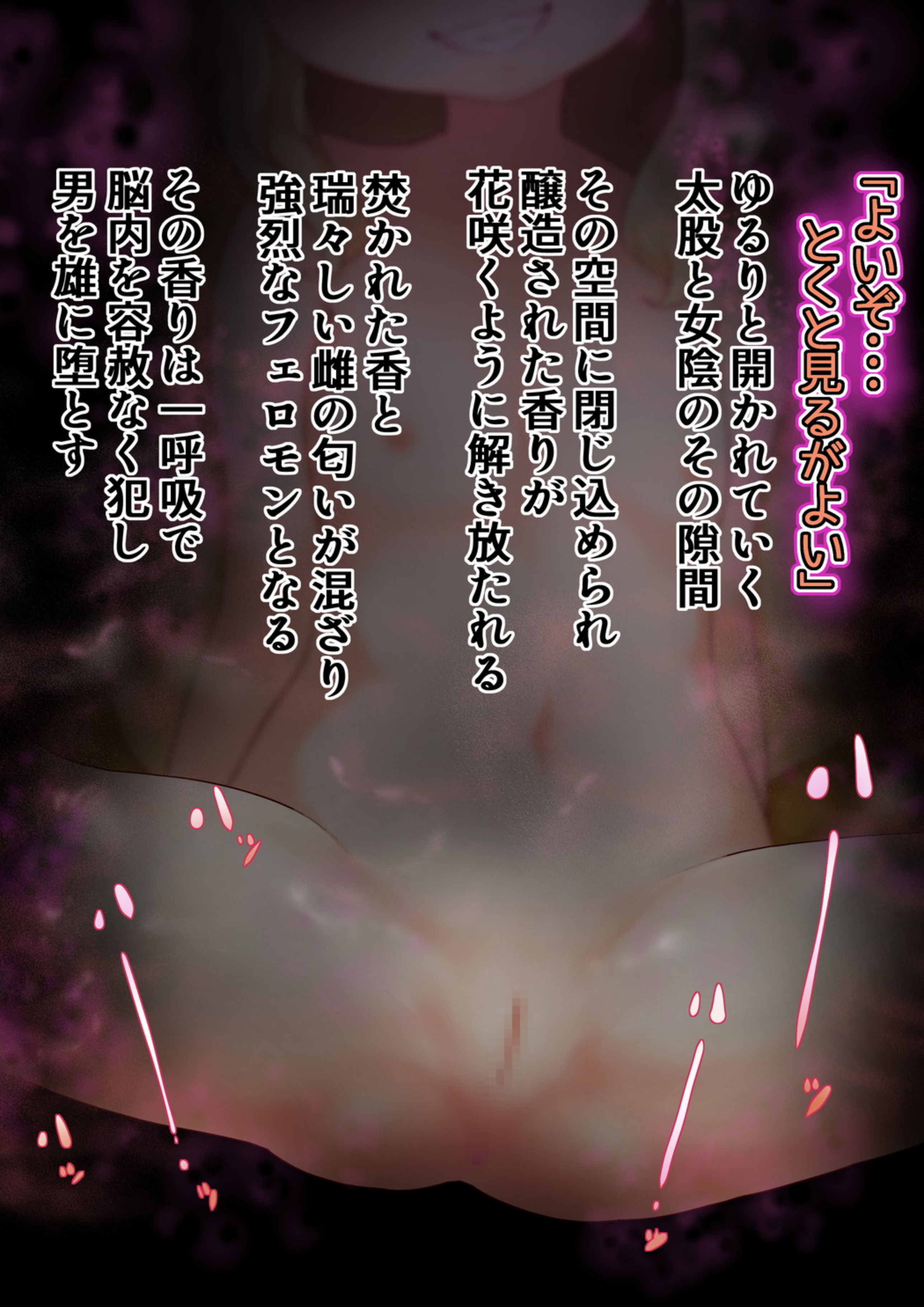
「存外におぼこいのう
そういう男は好きじゃぞ
初々しいわい」

くちゅ♡
くちゅ♡

そんな俺の様子を
満足げに眺めながら
女狐がゆらりと腰を動かすたび
くちゅ、くちゅと
微かに水音が響く
「存外におぼこいのう
そういう男は好きじゃぞ
初々しいわい」
確かに、女体を初めて
見るような初心な反応で…
羞恥に顔が燃えるようだ
くちゅ
くちゅ

『よいぞ…
とくと見るがよい』
ゆるりと開かれていく
太股と女陰のその隙間
その空間に閉じ込められ
醸造された香りが
花咲くように解き放たれる
じわ
あ

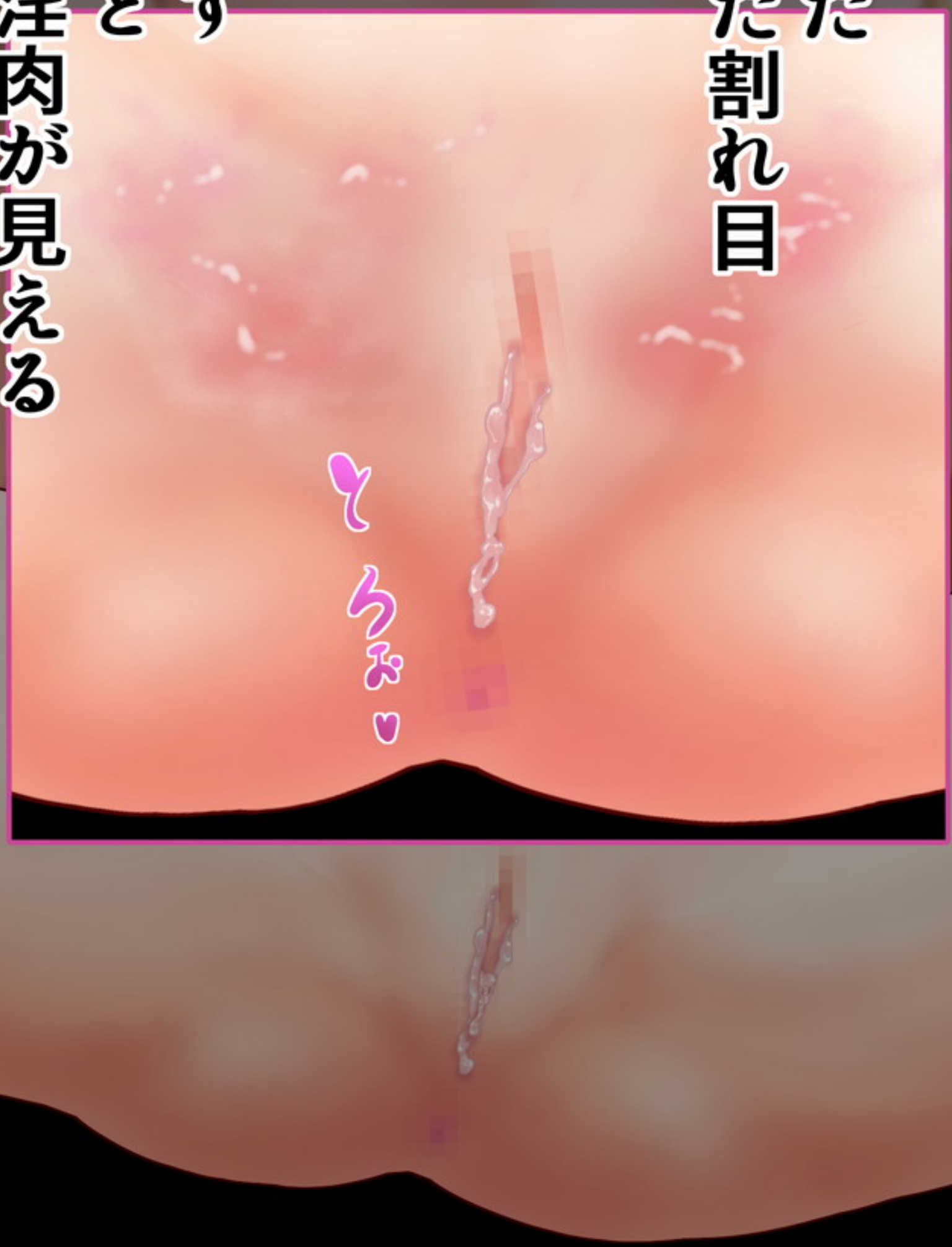

『よいぞ…
とくと見るがよい』
ゆるりと開かれていく
太股と女陰のその隙間
その空間に閉じ込められ
醸造された香りが
花咲くように解き放たれる
焚かれた香と
瑞々しい雌の匂いが混ざり
強烈なフェロモンとなる
ゴクッ…


「よいぞ…
とくと見るがよい」
ゆるりと開かれていく
太股と女陰のその隙間
その空間に閉じ込められ
醸造された香りが
花咲くように解き放たれる
焚かれた香と
瑞々しい雌の匂いが混ざり
強烈なフェロモンとなる
その香りは一呼吸で
脳内を容赦なく犯し
男を雄に堕とす

限界を超えて昂ぶった
直後に目に飛び込んだのは
誘うように濡れた
綺麗な桃色をした割れ目

限界を超えて昂ったた
直後に目に飛び込んだのは
誘うように濡れた
綺麗な桃色をした割れ目

毛は生えておらず
その分はっきりと
しとどに濡れた淫肉が見える



時折ひくひくと動くそれは
手を招いているようだった

『ヌシが望まぬなら
次は手と口で可愛がってやろう』
『…じゃが、どうじゃ？』
ぴくっ
ぴくっ

「ヌシが望まぬなら
次は手と口で可愛がってやろう」
「・・・じゃが、どうじゃ？」
「想像してみよ・・・♪」
「ワシの腰をつかんで
好きなだけその剛直を
肉壷に突き立てるんじゃ」

とろぉ

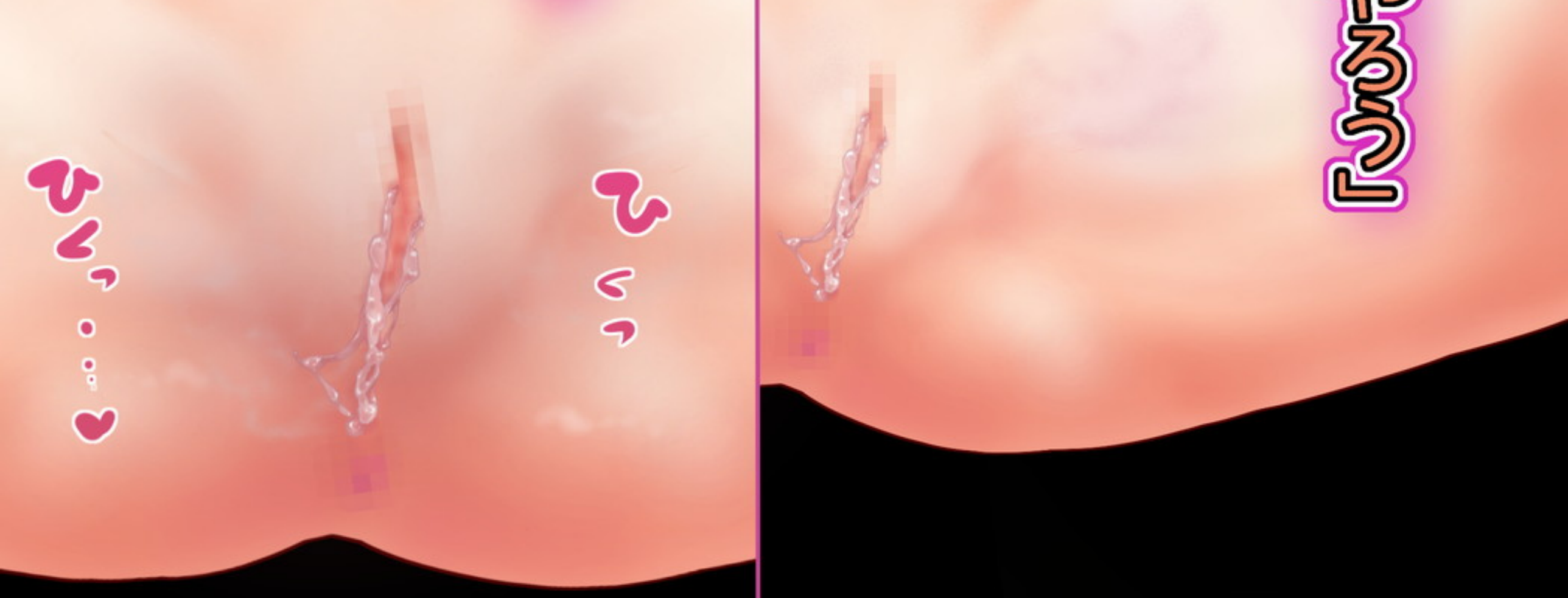
「ヌシが望まぬなら
次は手と口で可愛がってやろう」

「・・・じゃが、どうじゃ？」

「想像してみよ・・・♪」

「ワシの腰をつかんで
好きなだけその剛直を
肉壷に突き立てるんじゃ」

「ヌシのソレだと
ワシの蜜壷は
ぎちぎちになるのう・・・
くくく」



自分の親指はどしかない
その入り口が壊れてしまわないか
それは自分をひきとめる
最期の建前だった

ぐ！！！

自分の親指ほどしかない
その入り口が壊れてしまわないか
それは自分をひきとめる
最期の建前だった
手だけでもう病み付きで
狂いそうなほどだった
あそこは一体どんなに…

ぐ…
ぐ…
ぐ…
ぐ…
ト
ト
ク
ク

自分の親指ほどしかない
その入り口が壊れてしまわないか
それは自分をひきとめる
最期の建前だった
手だけでもう病み付きで
狂いそうなほどだった
あそこは一体どんなに…
一度味わってしまえば
二度と戻ってこれない
そんな予感すらあるのに
心のどこかには熱に浮かされ
目の前の小さな体で
淫欲を貪ろうとする獣がいる

ドクン…
ドクン…
ドクン…
ドクン…

必死に自分を抑える俺に
淫音が聞こえるよう
狭く小さな秘部をひろげ
上目遣いでくすりと笑う
『そして、肉ひだ一層一層が
肉棒に絡みつき舐め回し…』
くぱぁ

必死に自分を抑える俺に
淫音が聞こえるよう
狭く小さな秘部をひろげ
上目遣いでくすりと笑う

そして、肉ひだ一層一層が
肉棒に絡みつき舐め回し…」

「メスの子種をねだって
根元から先までうねるのよ…」

子宮のある部分を撫でながら
耳朶にしみ込ませる様に誘う

ぴくっ

ぴくっ

必死に自分を抑える俺に
淫音が聞こえるように
狭く小さな秘部をひろげ
上目遣いでくすりと笑う

そして、肉ひだ一層一層が
肉棒に絡みつき舐め回し…」

『ヌシの子種をねだって
根元から先までうねるのよ…』

『子宮のある部分を撫でながら
耳朶にしみ込ませる様に誘う

『…くふ！　くふふ！
いいぞ、良い顔になってきたのう！』

「ここまで体躯に差があるものと経験は、まさかあるまい？」
「ヌシにとってはまたと無い機会じゃ…そうじゃろう？」
ぐちゅ
とろっ
ドクン

『ここまで体躯に差があるものと経験は、まさかあるまい？』

『ヌシにとってはまたと無い機会じゃ・・・そうじゃろ？』

にいっと歯をみせ笑う

俺は喰われる

そんな確信すら感じさせる

妖狐の誘いを俺は・・・

ドクン

ドクン

とろ

とろ

ドッ

ク！

『ここまで体躯に差があるものと経験は、まさかあるまい？』
『ヌシにとってはまたと無い機会じゃ・・・そうじゃろ？』
にいっと歯をみせ笑う
俺は喰われる
そんな確信すら感じさせる妖狐の誘いを俺は・・・
とても魅力的だと思えた人生に一度しかない好機だと
ぐちゅ
とろぉ
ドクン！
ドクン！
ドクン！
ドクン！

すぅ…
「ただし契るなら
ワシが満足するまで、じゃ」

「ただし契るなら
ワシが満足するまで、じゃ」
「なに、中途半端で終わると
ワシが生殺しになるんじゃよ」
ニヒ♥
「それで構わぬなら
存分に契ろうぞ・・・」

「ただし契るなら
ワシが満足するまで、じゃ」
「なに、中途半端で終わると
ワシが生殺しになるんじゃよ」
「それで構わぬなら
存分に契ろうぞ・・・」
「それともやはり
手とクチがよいかの？」

「亀の先をちうちうと吸いながら
手で嬲るとの
みなよい声で鳴くんじゃ」
ぺぺ

にぱー

「亀の先をちうちうと吸いながら
手で嬲るとの
みなよい声で鳴くんじゃ」

「ワシの手の味は
ようく知っておろう？」

抗えず何度も
搾られた事を思い出し
体が震える

「ヌシは吸われるより
舌で愛撫が良いか？」
にっ

「ヌシは吸われるより舌で愛撫が良いか？」
「ワシらの舌は人族と少し違うようでの」
「柔らかい部分にぴたりと吸い付くのじゃ」

「ヌシは吸われるより
舌で愛撫が良いか？」

「ワシらの舌は
人族と少し違うようでの」

「柔らかい部分に
ぴたりと吸い付くのじゃ」

「舌をゆるりと動かしてやると
男も女も、ただ喘ぐのみよ」

「舐め取られるか
吸われるか…」

はっ

はっ

「ヌシはどちらを
試してみたいかの？」

みせつけるように
舌をいじり
明らかに誘っている

みえすいた誘惑なのに…
舌に触れられる指が
この上なく羨ましく
無自覚に唸り声すら漏れる

「ふふ…
そんな血走った目をせずとも」

「ただワシを求めれば良いのじゃ・・・」
「何も難しいことはあるまい？」
くふふ
「なに、試してみて気に入らなければ手だけで搾ってやろう」

「ヌシが困る「ことは何も無い
・・・そうじゃろう？」
こん
こん
ぞっとするほど
安心する笑みを浮かべ
狐は言葉を続ける

「口吸いで…も」
「女陰でも」

「口吸いでも」
「女陰でも…」
「雄に生まれた事を
天に感謝するじゃろうよ
くふふ」

「さあ・・・
どちらにするのじゃ？」

手と口を見つめた

女狐にとびかかった